

妖怪年代記

泉鏡花

青空文庫

一

予が寄宿生となりて松川私塾に入りたりしは、英語を学ばむ
 ためにあらず、数学を修めむためにあらず、なほ漢籍を学ばむこ
 とにもあらず、他に密に期することのありけるなり。

加州金沢市古寺町に両隣無き一字の大廈は、松山某が、
 英、漢、数学の塾舎となれり。旧は旗野と謂へりし千石取の館
 にして、邸内に三件の不思議あり、血天井、不開室、庭の竹
 藪是なり。

事の原由を尋ぬるに、旗野の先住に、何某とかや謂ひし武

士ふのありけるが、過あやまてることありて改易となり、邸やしきを追はれて国境くにぎかひよりぞ放たれし。其室そのしつは当時家中かちうに聞えし美人きこなりしが、女心をんなごころの思詰おもひつめて一途に家を明渡すが口惜くちをしく、我われは永えいせいいせいこのところ世此処とこに留まりて、外いへは出でじと、其居間そのに閉籠とぢこもり、内ぢやうより鎖おろを下せし後のちは、如何いかにかしけむ、影も形も見えずなりき。其後そのち旗野このやは此家すまに住ひつ。先住の室しつが自ら其身そのみを封じたる一室は、不開室となと称へて、開くことを許さず、はた覗くことをも禁じたりけり。

然さるからに執念の留まれるゆゑにや、常には然させる怪無くわいきも、後住こうぢうなる旗野きつじの家に吉事ごこある毎に、啾々しうくたる婦人をんなの泣声なきごゑ、不開室の内に聞えて、不祥ふしやうある時は、さも心地好こゝちよげに笑ひしと

かや。

旗野に一人の妾あり。名を村といひて寵愛限無かりき。一

るとし

ななかば

ゆふだちあと

さや

てら

きたむき

年夏の半、

驟雨後の月影

冴かに照して、

北向の庭なる竹藪

なごりしづく

しらたま

こぼ

ふぜい

に名残の雫、

白玉のそよ吹く風に溢るゝ風情、

またあるまじき

ながめ

観なりければ、旗野は村に酌を取らして、夜更るを覚えざりき。

すこ

お村も少しくなる口なるに、

其夜は心爽ぎ、

興も亦深かりけれ

のみすこ

いた

ゑ

ひと

そのよ

さわや

きようまた

ば、

飲過して

太く酔ひぬ。

人静まりて月の色の物

凄くなりけ

やうや

かつき

ふしど

い

かの

かはやのぼ

る頃、漸く盃を納めしが、

臥戸に入るに先立ちて、

お村は厠に上

らむとて、

腰元に扶けられて廊下伝ひに彼不開室の前を過ぎける

が、酔心地の胆太く、

ほとくと板戸を敲き、

「この執念深き奥

方、何とて今宵に泣きたまはざる」と打笑ひけるほどこそあれ、

こよひ

うちわら

なまぬる
生温き風一陣吹出で、腰元の携へたる手燭を消したり。何物

にか驚かされけむ、お村は一声きやつと叫びて、右側なる部屋の

障子を外して僵れ入ると共に、氣を失ひてぞ伏したりける。腰元

は驚き恐れつゝ、件の部屋を覗けば、内には暗く行灯点りて、お

村は脛も露に横はれる傍に、一人の男ありて正体も無く眠れる

は、蓋此家の用人なるが、先刻酒席に一座して、酔過して寝ね

たるなれば、今お村が僵れ込みて、己が傍に氣を失ひ枕をならべ

て伏したりとも、心着かざる状になむ。此腰元は春といひて、

もとお村とは朋輩なりしに、お村は寵を得てお部屋と成済し、

常に頤以て召使はるゝを口惜くてありけるにぞ、今斯く偶然に

枕を並べたる二人が態を見るより、悪心むらむらと起り、介抱も

せず、呼びも活いけで、故わざと灯とも火しを微ほにし、「かくては誰たが眼に
 も……」と北叟笑ほくそゑみつゝ、忍しのやかに立出たちいで、主人あるじの閨ねやに走はし行りき
 て、醉臥ゑひふしたるを揺覚ゆりさまし、「お村殿には御用人何某と人目を忍
 ばれ候さふらふ」と欺あざむきければ、短慮無謀ひごろの平素を、酒に弥いや暴あらく、怒氣
 烈火ごとの如く心頭に発して、岸破がばと蹶起はねおき、枕まくら刀がたな押取りて、一
 文字に馳出はせいで、障子を蹴放けはなして、驀まつ地に躍おどり込めば、人畜相にんちくあ
 戯はたはむれて形かたの如き不体裁。前後いとまなの分別に違すかう無く、用人の素
 頭べ、拔手ぬくても見せず、ころりと落おとしぬ。

旗野の主人は血刀提げ、あるじ ちがたみつき「やをれ婦人、疾く覚めよ」とお村の肋を蹴返せしが、活あばら けかへの法くわつはふにや合かなひけむ、うむと一声呼吸出ひとこゑいきいで、あれと驚き起返おきかへる。

主人はハツタと睨ねめつ附け、「畜生よ、男は一刀に斬棄てたれど、おのれ ませ汝には未だ為むやうあり」と罵り狂のゝしひ、呆あきれ惑ふお村の黒髪を把とりて、廊下を引摺ひきずり縁側に連つれ行きて、有無を謂はせず衣服を剥取はぎとり、腰に纏まとへる布ばかりを許して、手足を堅く縛いましめけり。

お村は夢の心地ながら、痛さ、苦しさ、恥はづかしさに、涙に咽むせび、声を震はせ、「こは殿にはものに狂はせ給たまふか、何故なにゆゑありての御折檻ごせつかんぞ」と繰返しては聞きこゆれども、此方こなたは憤いかり恚に逆上して、お村の言ことばも耳にも入らず、無二無三に哮たけりた立ち、お春を召して酒

を取寄せ、己おのが両手したゝに滴たらしては、お村の腹に塗り、背に塗り、全身余さず酒さけ漬びにして、其まゝ庭つぎに突出いだし、竹藪の中に投入むして、虫責ぜめにこそしたりけれ。

深夜の出来事なりしかば、内の者ども皆眠りて知れるは絶えてあらざりき。「かまへて人に語るべからず。執成立とりなせば面倒な

り」と主人はお春いましを警めぬ。お村が苦痛はいかばかりなりけむ、

「あら苦し、堪たへ難がたや、あれよく」と叫びたりしが、次第にも

のも得謂えはずなりて、夜も明方に到りては、唯泣ただく声の聞えしの

み、されば家内の誰たれかれ彼は藪の中とは心着こゝろづかで、彼の不開室あかずのま

の怪異とばかり想ひなし、且かつ恐れ且怪あやしみながら、元来泣声ある時

は、目出度めでたきことの兆候きざしなり、と言伝いひつたへたりければ、「いづれ

も吉兆に候ひなむきふら」と主人を祝せしぞ愚なりけるおろか。午前少しく前
のほど、用人の死骸を発見みいだしたる者ありて、上を下へとかへせし
が、主人は少しも騒ぐ色なく、「手討てうちにしたり」とばかりにて、
手続てづきを経てこと果てぬ。お村は昨夜ゆうべの夜半より、藪の真中まなかに打
込まれうちこ、身動きだにもならざるに、酒の香かを慕したひて寄来る蚊よりくの群
は謂ふも更さらなり、何十年を経たりけむ、天日てんじつを蔽おほひかく隠かくして昼
猶闇なほくらき大藪なれば、湿地に生ずる虫どもの、幾万とも知れず群むらり
出でて、手足に取着き、這懸はいかり、顔とも謂はず、胸とも謂はず、
むずくと往来しつ、肌を嘗なめられ、血を吸はるゝ苦痛は云ふべ
くもあらざれば、悶もだえ苦み、泣き叫びて、死なれぬ業ごふを歎なげきける
が、漸次しだいに精尽せいき、根疲こんれて、氣の遠くなり行くにぞ、渠かれが最も

忌嫌いみきらへる蛇へびの蜿蜒のたるも知らざりしは、せめてもの僥倖げうかうなり、されば玉たまの緒をの絶えしにあらねば、現うつに号泣がうきふする糸より細き婦人をんなの声は、終日ひねもす休やむ間ひまなかりしとぞ。

其日も暮れ、夜に入りて四辺あたりの静しづかになるにつれ、お村が悲喚ひくわんの声こゑ冴さえて眠り難がたきに、旗野の主人も堪兼たまりかね、「あら煩惱うろさし、いで息の根を止めむず」と藪はしりいの中に走はしり入り、半死半生の婦人をんなを引出ひきいだせば、総身そうしん赤く腫はれたるに、紫斑しはん々の痕あとを印し、眼も中あてられぬ惨状ありさまなり。

かくても未だ怒いまいかりは解いけず、お村の後手うしろでに縛くりたる縄の端はしを承な塵げしに潜くぐらせ、天井より釣下つりさげて、一太刀斬附きりつくれば、お村ははツと我に返りて、「殿、覚えておはせ、御身おんみが命を取らむまで、妾わらは

は死なじ」と謂はせも果てず、はたと首を討落せば、骸は中心
を失ひて、真逆様になりけるにぞ、踵を天井に着けたりしが、
血汐は先刻脛を伝ひて足の裏を染めたれば、其が天井に着くとと
もに、怨恨の血判二つをぞ捺したりける。此一念の遺物拭ふに
消えず、今に伝へて血天井と謂ふ。

人を殺すにも法こそあれ、旗野がお村を屠りし如きは、実に惨
中の惨なるものなり。家に仕ふる者ども、其物音に駈附けしも、
主人が血相に恐をなして、留めむとする者無く、遠巻にして打
騒ぎしのみ。殺尽せしお村の死骸は、竹藪の中に埋棄てて、
跡もせざりけり。

三

はじめお村を讒ざんししお春は、素知らぬ顔にもてなしつゝ此家このやに勤め続けたり。人には奇癖のあるものにて、此婦人このをんな太く蜘蛛くもを恐れ、蜘蛛といふ名を聞きてだに、絶叫するほどなりければ、況まして其物そのものを見る時は、顔の色さへ蒼あをざめて死せるが如ごとくなりしかや。

お村が虐殺なぶりごろしに遭ひしより、七々日なくなぬかにあたる夜半よはなりき。お春は廁かはやに起出おきいでつ、帰かへりには寝惚ねぼけたる眼の戸とまど惑まどひして、彼血天井かのの部屋へ入りにき。それと遽にはかに心着こころづけば、天窓あたまより爪先まで氷を浴ぶる心地して、齒の根も合はず戦わなきつゝ、不気味に堪たへぬ顔

を擡あげて、手燭ぼんぼりの影幽かすかに血あしの足痕あとを仰あふぎ見る時しも、天井より糸を引きいて一いつ疋びきの蜘蛛のんど垂たれ下り、お春の頬こゝろに取とり着つくにぞ、あと叫たちびて立た竦すくめる、咽喉ののどを伝つひ胸むねに入り、腹はらより背せに這は廻まはれば、声こゑをも得え立てず身みを悶もえ虚空こくうを掴つかみて苦くるみしが、はたと僵たふれて前後みづかを失うひけり。夜更よふけの事こととて誰たれも知らず、朝あしたになりて見み着つけたる、お春の身体からだは冷ひやたかりき、蜘蛛こもの這はへりし跡あとやらむ、縄くひにて縊くりし如ごとく青あおき条ぢをぞ画えがきし。

眼まのあたり 前さき お春が最期さいごを見てしより、旗野の神経しんけい狂くる出ひだし、あら

ぬことのみ口走くちをりて、一ひと月つき余あまりも悩なやみけるが、一夜あるよ月の明あきかな

りしに、外とのかた方に何なんやらむ姿すがたありて、旗野をおびき出いすが如ごとく、

主人あるじは居室あるまを迷まよ出ひでて、漫そろに庭にわを徇さまよ行いひしが、恐おそしき声こゑを發は

して、おのれ！　といひさま刀を抜き、竹藪に躍をどり菟うりて、えいと殺そぎたる竹の切口きりぐち、斜ななめに尖とがれる切先きつさきに転まろべる胸を貫きて、其場に命を落せしとぞ。仏家ぶつの因果いんぐわは是これならむかし。

旗野の主人果てて後のち、代よを襲つぐ子とても無かりければ、やがて其家そのへは断絶たえにけり。

数歳すさいの星霜を経て、今松川の塾となれるまで、種々さま／＼人の住す

替みりしが、一月居ひとつきゐしは皆無にて、多きも半月を過ぐるは無し。

はなは

甚はなはだしきに到りては、一夜ひとよを超えて引越せしもあり。松川彼処かしこに

住すみてより、別かはに變りしこともなく、二月余も落着ふたつきけるは、い

と珍きんしきことなりと、近隣きんりんの人は噂うはさせり。さりながらはじめの

内は十幾人じふいくたりの塾生ありて、教場けうぢやう太く賑いたひしも、二人三人と

去りて、果は一人^{はて いちにん}もあらずなりて、後^{のち}にはたゞ昼^{ひる}の間通学生^{うち}の来るのみにて、塾生は我一人^{われ いちにん}なりき。

前段^{すで}既に説けるが如く、予が此塾に入りたりしは、学問すべきためにはあらず、いかなる不思議のあらむかを窺^{うかゞひみ}見むと思ひしなり。我には許せ。性^{せい}として奇怪なる事とし謂へば、見たさ、聞きたさに堪^たへざれども、固^{もと}より頼む腕力ありて、妖^{えう}怪^{くわい}を退治せむとにはあらず、胸^{たくは}に蓄^{たくは}ふる学識ありて、怪異を研究せむとにもあらず。俗に恐いもの見たさといふ好事心^{ものずき}のみなり。

さて松川に入塾して、直^{たゞ}ちに不開室^{あかすのま}を探検せんとせしが、不開室は密閉したるが上に板戸を釘^{くぎ}付^{づけ}にしたれば開くこと無し。僅^{わづか}に板戸の隙間より内の模様を窺ふに、畳二三十も敷かるべく、

柱は参差しんしと立たちならべり。日中なれども暗澹あんたんとして日の光幽かすかに、
 陰々たる中に異形いぎやうなる雨漏あまもりの壁に染みたるが仄見えて、鬼氣
 人に逼せまるの感あり。即ち隙見すなはしたる眼の無事なるを取柄すきみにして、
 何等なんらの発見せし事なく、踵きびすを返して血天井を見る。こゝも用無き
 部屋なれば、掃除せしこともあらずと見えて、塵ちりほこり埃床を埋め、
 鼠ねずみの糞梁ふんづたに堆く、障子襖ふすまも煤果すすけはてたり。そこぞと思ふ天井も、
 一面に黒み渡りて、年経としふる血の痕の何処いづこか弁じがたし、更科さらしなの
 月四角でもなかりけり、名所多くは失望の種となる。されどなほ
 余すところの竹藪あり、蓋けだし土地の人は八幡やはたに比し、恐れて奥を
 探る者無く、見るから物凄ものすごき白日闇はくじつあんの別天地、お村の死骸も
 其処そこに埋めつと聞くほどに、うかとは足を入難いれがたし、予は先づ支し

たくとりかゝ
度に取懸れり。

誰にか棄てられけむ、一頭流浪の犬の、予が入塾の初より、
数々庭前に入来り、そこはかと餌をるあり。予は少しく
思ふよしあれば、其頭を撫で、背を摩りなどして馴近け、賄
の幾分を割きて与ふること兩三日、早くも我に臣事して、犬
は命令を聞くべくなれり。

四

水曜日は諸学校に授業あるに關らず、私塾大抵は休暇なり。
予は閑に乘じ、庭に出でて彼の竹藪に赴けり。然るに予てより斥

候きこうの用に充あてむため馴ならし置おきたる犬このときをりの此時折きたよく来りければ、
 彼かれを真先に立たしめて予は大胆だいたんにも藪いに入れり。行くこと未いまだ
 幾いくばく干ならず、予に先むじて駈かけ込みたる犬は奥深く進みて見えず
 なりしが、呀あなやなにごと何事の起りしぞ、乳虎にうこいつせい一声高く吠えて藪さうちばはか中俄
 に物騒ものさわがし、其響そのびきに動揺せる満藪まんさうの竹葉ちくえふあひふ相触れてざわ／＼
 ／＼と音おとしたり。予はひやりとして立停たちどまりぬ。稍やゝありて犬は奥
 より駈かけきた来り、予が立てる前を閃過せんくわして藪おもての外へ飛出とびいだせり。
 其劍幕けんまくに驚きまどひて予も慌あわたゞしく逃にげ出だし、只見とみれば犬は
 何やらむ口に銜くはへて躍り狂ふ、こは怪し口に銜へたるは一尾いちびの魚うを
 なり、そも何ぞと見むと欲して近寄れば、獲物えものを奪ふと思ひけ
 む、犬は逸散いつさんに逃去にげさりぬ。予は茫然ぼうぜんとして立ちたりけるが、

想ふに藪の中に住居へるは、狐か狸か其類ならむ。渠奴犬の為に
 劫かされ、近鄰より盜來れる午飯を奪はれしに極まりたり、
 然らば何ほどのことやある、と爰に勇氣を回復して再び藪に侵入
 せり。

置翠滋蔓繁茂せる、竹と竹との隙間を行くは、篠突く雨の間
 を潜りて濡れまじとするの難きに肖たり。進退頗る困難なるに、
 払ふ物無き蜘蛛の巣は、前途を羅して煙の如し。蛇も閃きぬ、蜥
 蜴も見えぬ、其他の湿虫群をなして、縦横交馳し奔走せる状、
 一眼見るだに胸悪きに、手足を縛され衣服を剥がれ若き婦人の肥
 肉を酒塩に味付けられて、虫の膳部に佳肴となりしお村が
 當時を憶遣りて、予は思はずも慄然たり。

こゝはや藪の中央ならむと旧来し方を振返れば、真昼は藪に寸断されて点々星に髣髴たり。なほ何程の奥やあると、及び腰に前途を視む。時其時、玄々不可思議奇絶怪絶、紅きものちらりと見えて、背向の婦人一人、我を去る十歩の内に、立ちしは夢か、幻か、我はた現心になりて思はず一步引退れる、とたんに此方を振返りし、眼口鼻眉如何で見分けむ、唯、丸顔の真白き輪郭ぬつと出でしと覚えしまで、予が絶叫せる声は聞えて婦人が言は耳に入りぬ、「こや人に説ふ勿れ、妾が此処にあることを」一種異様の語気音調、耳朶にぶんと響き、脳にぐわらくと浸み渡れば、眼眩み、心消え、氣も空になり足漾ひ、魂ふらくと拔出でて藻脱となりし五尺の殻の縁側まで逃げたる

は、一秒を経ざる瞬間なりき。腋下に颯と冷汗流れて、襦袢の背はしと濡れたり。馳せて書斎に引籠り机に身をば投懸けてほつと吐く息太く長く、多時觀念の眼を閉ぢしが、「さても見まじきものを見たり」と声を発して眩きける。「忍ぶれど色に出にけり我恋は」と謂ひしは粹なる物思ひ、予はまた野暮なる物思に臆病の色類に出でて蒼くなりつゝ結ばれ返るを、物や思ふと松川はじめ通学生等に問はるゝ度に、口の端むずくするまで言出したさに堪ざれども、怪しき婦人が予を戒め、人に勿謂ひそと謂へりしが耳許に残り居りて、語出でむと欲する都度、おのれ忘れしか、秘密を漏らさば、活けては置かじと囁く様にて、心済まねば謂ひも出でず、もしそれ胸中の疑碓を吐きて智識の

をしへう
教を請けむには、
胸襟乃ち春開けて臆病疾に癒えむと思へど、

無形の猿轡を食まされて腹のふくるゝ苦しさよ、斯くて幽玄

の裡に数日を閲せり。

いつせき
一夕、松川の誕辰なりとて奥座敷に予を招き、杯盤を排

し酒肴を薦む、献酬数回予は酒といふ大胆者に、幾分の

力を得て積日の屈託稍散じぬ。談話の次手に松川が塾の荒涼た

るを歎ちしより、予は前日藪を検せし一切を物語らむと、「実

は……」と僅に言懸けける、正に其時、啾々たる女の泣声、針

の穴をも通らむず糸より細く聞えにき。予は其を聞くと整しく口

をつぐみて悄気返れば、春雨恰も窓外に囁き至る、瀟々々

音に和し、長吁短歎絶えてまた続く、婦人の泣音怪むに堪

へたり。

五

「あれは何が泣くのでせう」と松川に問へば苦い顔して、談話を
傍へそらしたるにぞ推しては問はで黙して休めり。ために折角
の酔は醒めたれども、酔うて席に堪へずといひなし、予は寢室に
退きつ。思へば好事には泣くとぞ謂ふなる密閉室の一件が、
今宵誕辰の祝宴に悠々歡を尽すを嫉み、不快なる声を発して
其快樂を乱せるならむか、あはれ忌むべしと夜着を被りぬ。眼は
眠れども神は覺めたり。

寝られぬまゝに夜は更けぬ。時計一点を聞きて後、漸く少しく眠気ざし、精神朦々として我我を弁せず、所謂無現の境にあり。時に予が寝ねたる室の襖の、スツとばかりに開く音せり。否唯音のしたりと思へるのみ、別に誰そやと問ひもせず、はた起きなほ直りて見むともせず、うつら／＼となし居れり。然るにまた畳を摺来る蹻音聞えて、物あり、予が枕頭に近寄る氣勢す、はてなと思ふ内に引返せり。少時してまた来る、再び引返せり、三たびせり。

此に於て予は猛然と心覺めて、寝返りしつゝ眼を睜き、不図一見して蒼くなりぬ。予は殆ど絶せむとせり、そも何者の見えしとするぞ、雪もて築ける裸体の婦人、あるが如く無きが如き灯の

蔭に朦朧もうろうと乳房のあたりほの見えて描ける如くイめり。

予は叫いばむとするに声出でず、蹶はねお起きて逃げむと急あせるに、磐ばんじ

石やくいちざ一座夜着を圧して、身動きさへも得えならねば、我あること

を気取らるまじと、愚おろかや一縷いちるの鼻息びそくだもせず、心中に仏みなの御名を

唱となへながら、戦わなく手足は夜着あふを煽りて、波の如くに揺らめいたり。

婦人は予を凝視みつむるやらむ、一種の電氣を身体みうちに感じて一際ひときは

毛穴のひとの弥立よだてる時、彼は得もいはれぬ声こを以て「藪もにて見しは此

人なり、テモ暖かに寝たる事よ」と眩つぶやけるが、まざくと聞きこゆ

るにぞ、氣も魂も身に添はで、予は一竦ひとすくみに縮みたり。

斯かくて婦人が無体にも予が寝ふすまし衾をかゝげつゝ、衝つと身を入るゝ

に絶叫して、護謨球ごむだまの如く飛とびあが上り、室しつの外おもてに転出まろびいでて畢生ひつせい

の力を籠め、艶魔を封ずるかの如く、襖を圧へて立ちけるまでは、
 自分なせし業とは思はず、祈念を凝せる神仏がしかなさしめ
 しを信ずるなり。

寒さは寒し恐しさにがた／＼震少しも止まず、遂に東雲まで
 立竦みつ、四辺のしらむに心を安んじ、圧へたる戸を引開くれ
 ば、臥戸には藻脱の殻のみ残りて我も婦人も見えざりけり。其夜
 の感情、よく筆に写すを得ず、いかむとなれば予は余りの恐しさ
 に前後忘却したればなり。

然らでも前日の竹藪以来、怖気の附きたる我なるに、昨夜の怪
 異に胆を消し、もはや斯塾に堪らずなりぬ。其日の中に逃帰
 らむかと已に心を決せしが、さりとては余り本意無し、今夜一夜

辛抱^{しんぼう}して、もし再び昨夜^{ゆうべ}の如く婦人の来ることもあらば度胸を据^すゑて其^その容貌と其姿態^{そのしたい}とを觀察せむ、あはよくば勇を震ひて言葉^{かは}を交し試むべきなり。よしや執着^{とゞま}の留りて怨を後世^{うらみ こうせい}に訴ふるとも、罪なき我を何かせむ、手にも立たざる幻影にさまで恐るゝことはあらず、と白昼^{なんびと}は何人も爾^{しか}く英雄になるぞかし。逢魔^{あふま}が時^{とき}の薄暗がりより漸次^{しだい}に元氣衰へつ、夜^よに入りて雨の降り出づるに薄ら淋しくなり増^{まさ}りぬ。漫^{そゞろ}に昨夜^{さくや}を憶^{おもひ}起^{おこ}して、転^{うた}た恐怖の念に堪^たへず、斯くと知らば日の中に辞して斯塾を去るべかりし、よしなき好奇心に駆られし身は臆病神の犠牲となれり。

只^{ひたすら}管洋灯^{ランプ}を明^{あか}くする、これせめてもの附元氣^{つけげんき}、机の前に端坐^{ただひとり}して石の如くに身を固め、心細くも唯一人更け行く鐘を数へつゝ

「早一時はやか」と呟く時、陰々として響き来る、怨むが如き婦人の泣声、柱を回り襖めくを潜り、壁に浸入しみいる如くなり。

南無三なむさん膝を立直たてなほし、立ちもやらず坐りも果てで、魂宙たましひに浮くところ、
 処に、沈んで聞こゆる婦人の声、「山田山田」と我が名を呼ぶ、
 あなやかうべふりかたむ
 呀と頭を掉傾け、聞けば聞くほど判然うたがひと疑も無き我が名の
 山田「山田山田」と呼立つるが、囁く如く近くなり、叫ぶが如く
 また遠くなる、南無阿弥陀仏たまたコハ堪らじ。

六

今はハヤ須臾しゆゆの間も忍び難がたし、臆病者と笑はば笑へ、恥も外聞

も要らばこそ、予は慌しく書齋を出でて奥座敷の方に駈行きぬ。

蓋し松川の臥戸に身を投じて、味方を得ばやと欲ひしなり。

既にして、松川が閨に到れば、こはそもいかに彼の泣声は正

に此室の裡よりす、予は入るにも入られず愕然として襖の外に

戦きながら突立てり。

然るに松川は未だ眠らでぞある。鬱し怒れる音調以て、「愛想

の尽きた獣だな、汝、苟くも諸生を教へる松川の妹でありながら、

十二にもなつて何の事だ、何うしたらまたそんなに学校が嫌なの

だ。これまで幾度と数知れず根競と思つて意見をしても少

しも料簡が直らない、道で遊んで居ては人眼に立つと思ふかし

て途方も無い学校へ行くてつちやあ家を出て、此頃は庭の竹藪

に隠れて居る。このあひだ此間み見つけた時には、腹は立たないで涙が出

たぞ」と切齒はがみをなして憤いきどほる。

かたはら

傍そばより老いたる婦人の声として「これお長、母様おつかさんのいふ事

にいさん

も兄様のおつしやる事もお前は合点がてんが行かないかい、狂氣きちがひの

やう

様な娘を持った私わたしや何といふ因果であらうね。其癖そのくせ、犬に吠え

られた時、お弁当のお菜さいを遣やつて口塞くちふさぎをした氣転まなんぞ、満

んざら

更の馬鹿でも無いに」と愚痴ぐちを零こぼすは母親ならむ。

松川は腹立たしげに「其それが馬鹿智慧と謂ふもんだ、馬鹿に小才こさい

のあるのはまるつきりの馬鹿よりなほ不可いけない。彼の時藪あの中から

ひきずりだ

引摺出して押入の中へ入れて置くと、死ぬ様な声を出して泣く

もんだから——何時いつだつけ、むゝ俺が誕生の晩だ——山田に何が

泣いてるのだと問はれて冷汗を掻いたぞ。貴様が法外な白痴だから己おれに妹があると謂ふことは人に秘かくして居る位をくらゐ、山田の知らないのも道理だが、これもつともで意見をするとは恥かしくつて言はれもしない。それでも親の慈悲や兄の情なさけで何うかして学校へも行く様に真人間にして遣やりたいと思へばこそ性しやうこり懲つを附けよう為に、昨夜ゆうべだつて左様だ、一晚裸にして夜着よぎも被きせずに打棄うつちやつて置いたのだ。すると何うだ、己おれにお謝罪わびをすれば未まだしも可愛かはいげ気があるけれど、いくら寒いたつて余あんまりな、山田の寢床へ潜もぐりこ込みに行きをつた。彼あれが妖怪と思違ひをして居るのも否いやとは謂はれぬ。妖怪より余よつぽど程怖い馬鹿なもの、今夜はもう意見をするんぢやあないから謝罪わびたつて承知はしない、撲なぐりころ殺すのだから左様思へ」と

咎しもとの音ひうと鳴りて肉を鞭むちうひゞきつ響むすめせり。女はひいくと泣きながら、
 「姉様謝罪おわびをして頂戴よう、あいたゝ、姉様よう」と、哀あはれなる声
 にて助たすけを呼ぶ。

今姉さんと呼ばれしは松川の細君なり。「これまで幾度謝罪を
 して進あげましても、お前様の料簡が直らないから、もうもう何と
 謂おきゝいつたつて御肯入れなさない、妾わたしが謂わつたつて所詮駄目しよせんです、
 あゝ、余り酷ひどうございますよ。少し御手柔おてやはらかに遊ばせ、あれゝ
 それぢやあ真個ほんとに死んでしまひますわね、母様、もし旦那つてば、
 御二人で御折檻なさるから仕様しやうが無い、えゝ何どうせうね、一寸ちよつと
 来て下ください」と声震はし「山田さん、山田さん」我を呼びしは、
 さては是これか。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆 別巻64 怪談」作品社

1996（平成8）年6月25日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十七卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月

※疑問点の確認、修正に当たっては、親本を参照しました。

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2006年3月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

妖怪年代記

泉鏡花

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>